

## 『冷血』研究 (2)

### ——タイトルの多義性をめぐって——

大 園 弘

#### はじめに

収監中のペリーは、『冷血』の原稿をしきりに読みたがったという。カポーティはこの要求に応じて、原稿の断片を携えて何度かペリーらとの面会に臨んだ。ペリーは「冷血 (In Cold Blood)」というタイトルに大いに不満を抱いていた。彼には「冷酷に (in cold blood)」罪を犯したわけではないとの思いがあったからである。これに対し、カポーティはタイトルには二重の意味があるのだと告げた。すなわち、ペリーが不満だとした意味(犯罪の冷酷さ)に加えて、もう一つ別の意味があるということを、カポーティは彼に告白したわけである。だがカポーティは、もう一つの意味は何かとのペリーの質問には答えなかった。<sup>(1)</sup>

怨恨が動機ならわからぬでもないが、見ず知らずのクラター氏の喉をナイフでかき切り、彼を含む一家4人の頭部を至近距離から散弾銃で撃って殺害した行為は、「冷血」という形容では言い尽くせないほど残忍極まりない。ペリーの言い分がどうであれ、多くの読者はタイトルからペリーらが犯した殺人行為の残酷さを当然の如くに連想するであろうし、カポーティがタイトルに込めた意味合いの一つも、もちろん、それを指すであろう。

ところで、カポーティがペリーに説明しなかったタイトルのもう一つの意味とは何だったのか。<sup>(2)</sup> また、カポーティはなぜペリーにそれを説明しなかったのか。本稿では作品を手がかりにしながら、まず、これらの疑問点について考

察する。併せて本稿では、カポーティの意図とは別の観点から、この物語の「冷酷な」と呼ぶに相応しいその他の幾つかの側面にも触れてみたい。

## I. タイトルのもう一つの意味

周知のとおり、クラター事件の報道(1959年11月15日)から『冷血』の出版(1965年10月)<sup>(3)</sup>に至るまでには6年近くを要している。ペリーらの処刑(1965年4月14日)が数回の控訴審により延期されたために、結末部分が執筆できなかったからである。<sup>(4)</sup>

カポーティが『冷血』というタイトルを思いついたのは、この6年間の比較的早い時期だった。<sup>(5)</sup>だが、その時期がいつであれ、『冷血』の一つの意味は上述のとおり明らかであり、ペリーが異を唱えた意味に等しい。クラター氏一家4名の頭部は散弾銃の弾丸で粉碎され、葬儀場に安置された彼らの頭部は「すっぽりと綿でくるまれ、張りきった風船の2倍ほどに膨れあがった繭のように見えた。」<sup>(6)</sup>殺害の動機の如何を問わず、まさしく血も凍る残酷な殺人行為である。

しかし、事件が犯人逮捕の局面を迎えると、カポーティはホルカムという「この小さな孤立したコミュニティーに殺人犯がどのような波紋を投げかけたか」という当初の調査目的をさらに拡張せざるを得なくなった。すなわち、彼には犯人像と犯行動機に迫るという新たな仕事待ちうける恰好となったのだが、『冷血』というタイトルのもう一つの意味は、事件のこの急展開を抜きにして語ることはできない。

犯人たちは事件発生から約ひと半月後の1959年12月30日にラスヴェガスで逮捕された。その1週間後に彼らは事件の主任捜査官であるカンザス州捜査局(KBI)のアルヴィン・デューイほか3名の捜査官に付き添われてカンザス州フィニー郡の郡庁舎に送還されてきた。カポーティはその1週間後には早くも

犯人たちとの面会を果たしている。真偽のほどは不明だが、「伝記」によると、彼は犯人らとの面会の許可を得るために、政界の有力者に1万ドルの賄賂の提供を申し出たという。さらに、1963年6月以降は、数百通に及ぶことになる犯人らとの手紙のやり取りも認められた。<sup>(7)</sup>

ペリー・エドワード・スミス。リチャード・ユージン・ヒコック。この二人がクラター氏一家の殺人犯だった。カポーティは彼らとの面談や文通や関係者への取材を通して、徐々にペリーに惹かれていった。ディックは「深みのない、空っぽで無価値の、取るに足りないペテン師」(340)だったが、ペリーの方はカポーティがそれまでに著した作品の登場人物と幾つかの点で重なり合う特質を持ち合わせていた<sup>(8)</sup>、ペリーの幼少期の境遇とカポーティのそれは似かよっていった。<sup>(9)</sup> 子供時代のカポーティとペリーは、どちらも「アル中の母親と不在の父親と養家に悩まされた。」<sup>(10)</sup> 何よりも幼少期のこの共通点が両者の距離を縮める主要因であったと思われる。

だが、悲惨さの度合いにおいては、ペリーの方が遥かに深刻だった。ペリーはアイルランド系の父親とインディアンの母親との混血児として生まれた。アル中の母は父の留守中に子供たちの前で船員や黒人に身を任せるような女だった。こんな母に対する父の暴力も絶えなかった。ペリーが7歳の頃、両親は別居し、母は父のトラックを盗み、子供たちを連れてサンフランシスコへ移っていった。母には子供たちの養育能力が欠けており、ペリーはその頃から「家出をしたり盗みを働いたりして、少年鑑別所に入出入りを繰り返すようになった。」(275) 送り込まれたある施設では、管理人の女が腎臓疾患によるペリーの寝小便に腹を立て、彼を虐待した。その後、思春期を迎えた頃には、父と極西部を放浪し、探鉱や狩猟をともにした時期もあったが、彼は「おれはおやじの奴隷(nigger)だった」(185)と、必ずしも幸せではなかった一時期として、その当時を振り返っている。そして16歳のときには、「父から逃れなければならない」(275)との思いから、彼は商船隊に入った。

カポーティはペリーのように施設に預けられたことはなかったし、他人から

肉体的な虐待を受けた経験もなかった。また、少年時代のカポーティにはスックという心の拠り所がたねに存在していたし、自伝的短編小説「クリスマスの思い出」(“A Christmas Memory” 1956)に描かれているように、養家の苦惱—ジェニー(スックの妹)による管理—もスックの深い愛情に相殺された。一方で、ペリーにはスックに相当する支えとなる人物が不在だった。デューイはペリーが「群れを追われた獣、傷ついてさまよう動物のような雰囲気を持っていた」(341)と述べているが、そこには幼い頃から父親同様「一匹狼」として生きてこざるを得なかった彼の人生が象徴的に表現されている。批評家ダンの言葉を借りれば、「ペリー・スミスは生まれながらの放浪者だった」<sup>(11)</sup>のである。カポーティとペリーには共通点の背後にこうした相違点があった。

しかし、このような違いがあったからこそ、カポーティは自分よりも悲惨な子供時代を過ごしたペリーに、より一層深い同情心を禁じ得なかったであろう。<sup>(12)</sup>「ペリー・スミスの人生は、決してバラ色ではなく、憐れむべきものだった。それは一つの蟹気楼からまた別の蟹気楼へと向かう醜く孤独な旅だった」(246)とはデューイの評言だが、それはカポーティ自身の感想でもあったのであろう。カポーティはそうしたペリーの姿に、もしかしたら自分がそうになっていたかもしれない自身の分身を見て取ったのであろう。作品ではディックに比してペリーに関する記述が質量ともにまさっているが、それもペリーに対するカポーティのこのような感情移入の必然の結果であった。

『冷血』執筆のプロセスにおいて、カポーティによるペリーへの思い入れは、ペリーがなぜ殺人を犯すような人物になってしまったのかという背景(原因)の究明という形をとった。カポーティはそれを2名の精神医学の専門家による所見を通して試みている。ひとりは、公判での証言に備えるべくペリーらの精神鑑定を買って出たW・ミッチェル・ジョーンズ医師である。しかし、証人席についたジョーンズ医師は、質問にはイエスカノーで答えてほしいという判事や検察側の強引な要求に阻まれて、被告たちに有利な弁護に繋がる十分な証言

の機会を奪われてしまった。カポーティ（語り手）は、「ジョーンズ医師に判断に苦しむ理由を説明する機会が与えられていたならば、医師はこう証言しただろう」（296）と述べたうえで、次のように続けている。

「ペリー・スミスは深刻な精神病の兆候を明らかに示しています。彼が私に語ったり、刑務所の記録の一部で証明されたところによれば、彼の子供時代は、両親の双方による残忍さと無関心が際立っています。彼は目標も愛情も、そして確固たる道徳的価値観を身につけることなく成長したようです。（中略）正確な精神医学の診断を下すには、広範な鑑定が必要となるでしょう。なお、現在の人格構造については妄想型精神分裂病の反応を示す構造と酷似しています。」（297-298）

裁判が行われたカンザス州はマクノートン準則（McNaughten rule）に沿っていた。つまり、犯行時に正常な精神状態になかった場合、被告は無罪となるのであり、もし、引用文のような所見が公判で披露されていたならば、判決は被告らに有利に傾く可能性が生じていたであろう。もちろん、ここではペリーらに有罪か無罪かという点が重要なのではない。注目すべきは、カポーティ（語り手）が披露されずに終わったジョーンズ医師の所見を代弁するという手法を用いながら、ペリーが殺人犯の性質を身につけてしまった原因が、彼の幼少期の生活環境に在るのだと間接的に示唆している点である。

同様の主張は、カポーティ（語り手）が、もう一人の精神医学の専門家であるジョゼフ・サテン博士の論文「明白な動機なき殺人—人格解体の研究」に触れながら、博士に代わってクラター氏襲撃の際のペリーの心理状態を次のように代弁することで、さらに強調されている。

「……クラター氏を襲ったとき、スミスは心理的な日食状態にあり、精神分裂病の深い闇の中に陥っていた。というのも、自分が殺害していると『突如気

づいた“対象は決して生き身の人間なのではなく、“過去において外傷となった出来事”の中心人物”であった。それは彼の父か？ 彼を嘲り、むち打った孤児院の尼僧たちか？ 忌々しい軍曹か？ 彼に“カンザス州から遠ざかっていろ”と命じた仮釈放監察官か？ そのうちの誰かだったかもしれないし、その全てであったかもしれない。」(302)

ここでは、ペリーの幼少期の生活環境に加えて、それ以降の幾つかのトラウマ体験が、ペリーの殺人行為の引き金となっていることが示唆されているのと同じ時に、ペリーをそうした体験の犠牲者であると捉えるカポーティ（語り手）の意識が表れてもいる。こうした認識が次に掲げるペリー自身の発言にも呼応し合っている点は興味深い。公判の前に友人ドナルド・カリヴァンに向けて発した言葉である。

「クラター家の人たちが何かをしたからというわけではなかった。あの人たちはおれになんの危害も加えたことはなかった。ほかの人たちみたいにはね。これまでずっとおれを傷めつけてきた連中のようにね。たぶん、クラター家の人たちは、たまたまその尻拭いをしなければならない人たちだったのだ。」(290)

カポーティは、ジョーンズ医師、サテン博士、ペリー自身の認識をこのように連ねることで、幼少期の生活環境のみならず、ペリーを取り巻く社会全体が殺人者ペリー・スミスを生み出したのだということを強調したかったのではない。ペリーはアメリカ社会の落とし子であり、被害者はむしろペリーの側であると。仮にカポーティがそう考えていたとしたならば、死刑というペリーへの判決は、ペリー自身の次の発言にも示唆されているように、加害者（アメリカ社会）が被害者（ペリー）に極刑を宣告するようなものであり、余りにも矛盾に満ち、且つ冷酷極まりないと言わざるを得ない。

「あの大草原の田舎者たち(訳注:陪審員たち)は、豚が残飯を平らげるみたいに、さっさと絞首刑に賛成票を投じるだろう。やつらの目を見ればそれは明らかだ。おれがこの法廷で唯一の殺人者だなんて、断じてあり得ない話だ。」  
(傍点筆者 289)

カポーティがペリーに明かさなかった「冷血」のもう一つの意味合いは、以上考察してきたとおりである。では、カポーティはなぜペリーにそれを伝えなかったのだろうか。

ペリーを取り巻く社会全体が殺人者ペリー・スミスを生み出したのにもかかわらず、その社会がペリーを裁くのは矛盾であり冷酷であるというカポーティの捉え方は、処刑の当日まで「もう一度処刑を延期してもらうのに、トルーマンが力になってくれるかもしれない」<sup>(13)</sup>と期待を捨てなかったペリーにとってみれば、まさに「神の声」だったはずである。それは真に自分を理解してくれる者の発想であるばかりか、刑の軽重をも左右する論拠となり得るからである。<sup>(14)</sup>にもかかわらず、カポーティはペリーに以上のようなタイトルの含意を伝えなかった。批評家の中には、ペリーらが極刑に処せられずに済む手立てを講じなかったカポーティのそうした姿勢こそ冷酷であるとして、彼に批判を浴びせた者さえいた。<sup>(15)</sup>

もしペリーにタイトルのもう一つの意味を告げていたとすれば、カポーティはペリーから上訴への働きかけを乞われていたに違いない。また実際に、カポーティ自身ものちに「ペリーらを救うためにあらゆる手段を講じることができた」<sup>(16)</sup>と認めてもいる。しかし、タイトルのもう一つの意味を告げるということは、同時に、「冷血」の完成の先送りという、カポーティにとっては甚だ不都合な事態を招くことを意味していた。ペリーらの救済と作品の完成のどちらを優先すべきか。自分自身のことと同じくらい二人のことを理解していた分だけ、カポーティのジレンマは深刻だった。<sup>(17)</sup>

カポーティは、結局、ペリーにタイトルのもう一つの意味を伝えないこと、

すなわち、作品の完成の方を選択した。しかし、この選択を、一部の批評家が非難したように、冷酷な行為であると断じてしまうのもまた、それはそれで冷酷であろう。たしかにカポーティは作品の完成を優先した。その結果、少なくともカポーティの働きかけによる処刑延期や刑の軽減の可能性は閉ざされてしまった。だが、彼の選択によってもたらされた文学上の意義は大きい。殺人者ペリーを生み出したのが社会全体であり、その社会がペリーを死刑に処するのは冷酷である、というタイトルのもう一つのメッセージが、作品の中にしっかりと描き込まれたわけであり、ペリーの肉体が減んだ後もペリーという象徴的人物は、文学作品の中で不滅の存在となったのである。カポーティにとって、作家としての立場を貫き通すことは、決してペリー・スミスへの裏切り行為でも冷酷な仕打ちでもなかった。それは彼に対する誠意の表現ですらあったのではなかろうか。

## II. 法律に翻弄される犯罪者

さて、ペリーらの逮捕(1959年12月30日)から処刑(1965年4月14日)に至るまでには、5年4ヶ月余りを要した。彼らの処刑は『冷血』の出版を意味していたために、カポーティにはこの歳月が気の遠くなるほどの長期に感じられた。<sup>(14)</sup> しかも、最初の裁判で、処刑日が予め1965年4月14日に確定していたわけではなかった。実際には、この5年余りのあいだに、被告らと弁護士による度重なる上訴によって、処刑日が5度も設定されなおすという経緯を辿っていった(最初の処刑予定日は1960年5月13日だった)。すなわち、カポーティは、結果として5年4ヶ月余りの年月が過ぎるのを、それと知ることもできずに、日一日とじっと耐え抜かざるを得なかった。本稿のテーマである「タイトルの含意」と直接的な関連性はないとはいえ、皮肉にも『冷血』の出版の過程で、カポーティはこうした冷酷な状況に晒されていたわけである。

ところで、この約5年4ヶ月であるが、犯人逮捕から処刑までにこれだけの



歳月を要したのは、上述のとおり、ペリー、ディック、及び彼らの弁護人による上訴につぐ上訴の結果であった。ここで注目すべきは、クラター事件のケースに限らず、当時のアメリカの法体系のもとでは、重大事件の裁判が一般的にこのような展開パターンを辿っていたという点である。「冷血」の語り手(カポーティ)は、当時のアメリカの上訴システムについて、作品の中で次のように述べている。

「一般的に裁判所は不十分な弁護しかなされなかったとして、将来、上訴されるという事態を避けるために、精力を傾注して弁護にあたることのできる一流の弁護士を指名する。しかしながら、そこそこの実力しか持ち合わせていない弁護士でさえ、運命の日を1年また1年と引き延ばすことが可能である。なぜならば、アメリカの法制下で普及している上訴システムが、幾らか犯罪者に有利に固定されている運命の歯車、もしくは偶然のゲームになっており、その参加者は、まずは州立の裁判所にはじまり、連邦裁判所を経て、究極の法廷である連邦最高裁判所に到達するまで、果てしなく勝負を続けることができるからである。」(330)

語り手(カポーティ)は、こうした上訴のシステムを「幾らか犯罪者に有利」であると認めつつも、決してこのシステムを支持しているわけではない。なぜならば、かりに犯罪者の「運命の日」を(弁護士の能力の優劣とは無関係に)先送りできたとしても、それによって得られるメリットが皆無であることを、上掲の引用文は物語っているからである。また、解釈のしかた次第では、「運命の日」の無軌道な延期は、被告たちにとって、むしろ拷問にも等しいとすら言えるであろう。処刑の延期により、死への恐怖心はもちろんのこと、彼らがさまざまな苦悩に苛まれる日々が、その分だけ増すからである。

カポーティは「アメリカ合衆国の死刑囚収容棟」と題したインタビュー記事の中で、このような上訴システムの欠陥を痛烈に批判している。彼はそれを「奇

妙にも複雑かつ実用性を欠くシステム (“the grotesquely convoluted and impractical system of legal appeals”)」であるとも、「抜け道的な愚考 (“loophole insanity”)」であるとも断じたいので、「囚人たちを檻の中に閉じ込め、精神医学的なケアもせず、運動もさせず、目的もないただ辛いだけの宙ぶらりん状態で、来る年も来る年も無為に過ごさせることこそ残酷であり異常である」<sup>(19)</sup>と述べている。

「冷血」の中心的テーマは、もちろん、上訴システムの問題点を暴き出すことではない。そのせいか、「冷血」においては、このシステムへの批判の強度は、「アメリカ合衆国の死刑囚収容棟」に比して、さほど大きくはない。しかしながら、それでもなお、死刑囚をめぐる法制上の問題に対するカポーティの関心は、決して小さくはないように思われる。犯罪者の刑事責任能力を判断する基準となるマクノートン準則とグラム準則への言及がそれを示す好例となっている。

マクノートン準則は、「犯罪行為の実行の時点において、被告人が、精神の疾患のゆえに理性を欠き、自分が行っている行為が何であり、どのような性質のものであるかを知らず、または知っていても、その行為が悪いことであるということを知らなかったということが、明白に証明されたときは、刑事責任能力なしとするもの」<sup>(20)</sup>と規定されている。クラター事件の裁判ではこのルールが適用されたものの、指名を受けた地元の精神科医——一般の開業医——が、わずか1時間程度の面談ののち、ペリーらには精神疾患なしと診断を下した。この診断結果は、ペリーらを有罪判決（死刑）へと導くことになるのだが、カポーティが訓練を受けた専門の精神科医にペリーらの精神鑑定が託されなかったことを疑問視していたのは明らかである。それは前節でも触れたとおり、彼が作品の中に精神医学の専門家であるジョーンズ医師とサテン博士の見解——少なくともペリーには精神疾患がみとめられるという見解——を挿入していることから十分に察せられるが、次のように述べていることから、その点にはもはや疑問の余地はない。

「精神科医と進歩的な法学者にとって大いなる悩みの種は、このマクノートン準則が英連邦の法廷と、合衆国では数州の法廷及びコロンビア特別区を除く法廷で支配的だという点である。それら例外の法廷では、一部の者には実用的ではないとみなされてはいるながらも、もっと寛大であるグラム準則を採用している。このルールは、わかり易く言うと、もし被告の違法行為が精神病もしくは精神障害の所産であれば、被告は刑事責任を問われないというものである。」(316)

ジョーンズ医師とサテン博士はともにグラム準則の考え方に依拠しており、もしペリーらの裁判でこのルールが採択されていたならば、少なくともペリーの精神疾患が認められた結果、彼の刑事責任が問われなかった可能性もあったのである。

もちろん、カポーティがグラム準則の適用によりペリーを無罪に導きたいと考えていたわけではない。彼が問題視したのは、どちらのルールが採択されるかによって、犯罪者といえども、その運命が左右されてしまうという法律の矛盾点である。それは上訴のシステムが孕んでいる問題点と性質を異にしているが、いずれの場合も、犯罪者が法律に翻弄されるという冷酷かつ不条理な立場に置かれる結果をもたらすという点で一致しているといえよう。

以上考察してきたように、「冷血」というタイトルには、アメリカの法律の在り方に対する批判の意味も読み取ることができるであろう。

### III. クラター事件の影響

クラター事件では無情にも6名(犠牲者4名と加害者2名)の命が奪われた。加えてこの事件は、当然のことながら、周囲の者にもさまざまなかたちで深刻な影響を及ぼした。そして、その幾つかは、「冷酷な(in cold blood)」と形容するに相応しい事例となっており、目立たぬながらも、「冷血」と題されたこの

作品に奥行きと深みを与える要因になっているように思われる。

そもそもカポーティがこの事件の取材をはじめたのは、この出来事が地元のコミュニティに及ぼした影響を調査するためであった。であれば尚のこと、「冷血」というタイトルの意味との関係で、それらの事例に言及しておく必要があろう。以下、本節では、人物名と併せて、「冷酷さ」の意味合いを略述する。

#### ボビー・ラップ (犠牲者ナンシー・クラターのボーイフレンド)

ボビーはガールフレンドのナンシーを殺人というかたちで亡くした。それ自体、彼には耐え難く残酷な出来事だったにちがいない。だが、それだけではなかった。彼が事件の発生直前までクラター家の居間でクラター氏らと一緒に過ごしていたことや、ラップ家がクラター家とは異なるカトリック教徒だったという理由で彼がクラター氏からナンシーとの交際（や結婚）に反対されていたこと、つまり、ボビーには犯行の動機と疑われるこうした要因があったせいで、無実にもかかわらず、彼は有力な容疑者として二度にわたり尋問を受けた。しかも、二度目の尋問で、彼は嘘発見器のテストを受けるよう求められもした。

無情にも、クラター事件はボビーにこうした二重の苦悩を体験させたのだった。

#### ベヴァリー・クラター (クラター家の次女。ナンシーの姉)

ベヴァリーが両親と兄弟を殺人で亡くしたことは、彼女にとって、ボビーの場合とは違った意味で、残酷な体験だった。その彼女は家族の葬儀が執り行われた3日後に、同じ協会で同じ牧師により結婚式を挙げた。地元の新聞の社交欄でこのニュースを読んで、「多くの読者が目を疑った。」(106)

批評家ガーソンは、このエピソードがハムレットの母である王妃が、王の死後ほどなくしてハムレットの叔父のクローディアスと再婚するという展開を想起させるとして、ベヴァリーの行為を非常識な行為であると批判的に解釈している。<sup>(21)</sup> ニュースを読んで目を疑った地元の人びとの中にも、同様の批判的な

受け止め方をした者も少なくはなかったであろう。だが、一見、無神経かつ冷酷とも思えるベヴァリーの行為には、彼女なりの思惑があった。もともと彼女の結婚式はその年のクリスマスの時期に予定されていたのだが、葬儀に集まった親類縁者への便宜を考慮して、彼女は非常識とも誤解されかねない決断を敢えて下したのであった。その意味において、辛く冷酷な立場に置かれていたのは、むしろ、ベヴァリー自身であったといえよう。

アルヴィン・デューイ（カンザス州捜査局の主任捜査官）

クラター事件によって冷酷な立場にたたされたのは、もちろん以上の2名にとどまらない。他にも作中人物の多くが、大なり小なり、この事件から何らかの深刻な影響を被った。カポーティがこの事件の取材を通して親交を深めていくことになった、捜査官アルヴィン・デューイとその家族もまた、例外ではなかった。

FBIの特別捜査官を歴任した経験豊富な47歳のデューイは、犠牲者ハーバート・クラターの親友でもあった。彼は「捜査がどんなに長引こうとも、たとえ、自分の生涯をかけることになっても」、真相を突きとめてみせるという確固たる意気込みで仲間の捜査官とともに捜査に着手した。その気構えは、「『個人的な問題』と見紛うほどだった。」(85) だが、初めのうちは何ら有力な手がかりが得られずに、彼は「強い焦燥感と挫折感にとらわれた。」(107) 煙草の本数は増え、3週間ほどで20ポンドも体重が減った。クリスマスが近づいた頃には、家族へのプレゼントのことも忘れ去ってしまうほど、「いつの間にか、クラター事件と無関係な問題は頭からはねつけるという心性になっていた。」(152) 一晩中ひっきりなしにかかってくる各方面からの電話に、妻マリーと二人の息子も落ち着いて眠れぬ夜が続いた。9歳の次男ポールは、ある朝、急に泣きだした。「母親にはわかっていた。ポールはどうして自分の周りが騒がしくなったのか、漠然と理解してはいたものの、そのせいで一ひっきりなしにかかってくる電話、玄関先に訪ねてくる見知らぬ人びと、父親の思い悩む目つきで一危機感を感じ

ていたのだ。」夫の仕事内容を熟知し、彼のよき理解者であったマリーも、「アルヴィン、わたしたち、いつもの生活に戻れるかしら」(109)と、つい本音を繰り返すほどになっていた。

クラター事件は、このように無情にもデューイとその家族を苦悩の淵に追い込んだのだった。

【ところで、カポーティが『冷血』を書き上げることの困難さ、とりわけ、ペリーらによる度重なる上訴によって、『冷血』の完成が先送りになるという事態に、激しい苦悩を体験したことはよく知られている。まさしくその点こそ「冷酷である (in cold blood)」と同情を寄せた読者も少なくはない。2005年に公開された映画『カポーティ』<sup>(22)</sup>はまさにそのような視点から作成された。

無論、本稿のテーマタイトルの多義性一に、そうした「出版に至るまでの作家の苦悩」までをも含み込んでしまうのは、明らかに逸脱である。しかしながら、そのような作家個人の苦悩は、事件の解明に難航を極めたデューイの苦悩に重ねられているようにも思われる。妻子を、いわば、巻き添えにしてまでも事件の真相究明に全力を傾注したデューイの尋常ならざる意気込みは、まさに、クラター事件を素材に選択し、それを自らがイメージしたノンフィクション・ノヴェルに仕上げなければならないというカポーティのこだわりと困難さそのものであったのではないか。「私は(この作品には)きみの視点が欠かせないと考えてきた」<sup>(23)</sup>、カポーティはデューイに宛てた手紙(1962年10月20日付)の中でそう綴っている。それは単に犯人を追う主任捜査官という作中人物の視点だけを意味していたのではないであろう。デューイとその家族に関わる詳細な記述が作品全体の少なからぬ部分を占めていることから察せられるように、カポーティはペリー・スミスだけではなく、デューイにも感情移入をしていたと考えることができるし、それを促したのは、上記のように、それぞれの立場での両者の苦悩とこだわりであった。]

## ホルカムの住人たち

事件の発生当初、カンザス州捜査局の捜査員たちは強盗説を退け、顔見知りによる怨恨説を有力視していた。地元住民の反応も同様だった。「人びとは犯人が自分たちの中にいると信じていた」し、クラター氏の兄弟のアーサー・クラターは「この事件が解決したときには、犯人が誰であれ、われわれがいま立っている場所から10マイル以内にいる人間だということがきつとわかります」(88)と断言していた。ところが、犯人は彼らの予想とは裏腹に、身近な人物ではなかった。それを知った住民たちの反応を、語り手(カポーティ)は次のように記している。

「ホルカムの住民の大部分は、不健全な噂、漠然とした不信や疑惑の中で7週間を過ごしてきたのだが、犯人が自分たちの中の人間ではなかったと聞かされて失望を感じているようだった。実際、二人のよそ者、二人の見知らぬ強盗がもつぱら責めを負うという事実を受け入れるのを、相当数の人びとが拒否した。」(傍点筆者 231)

なかには、犯人の逮捕後も「いつか真相が暴かれますよ。そうなったら、黒幕が見つかります」(231)と、身近な人物の関与の可能性を捨てきれない者(マートル・クレア)もいた。

ひとは、非日常的な出来事に対して不安感や恐怖心を覚える。そして、その出来事を合理的に解釈することで、それらの不快感を解消しようとする心的傾向を持つ。ポー(E.A. Poe)の作品の主人公たちが、殺人事件や不可思議な現象に直面した際に、理知の分析力をもって謎を解き明かし、恐怖や不安を乗り越えるのは、同じ心的メカニズムの高度な事例であろう。ホルカムの住民たちにとって、「怨恨による身近な者の犯行」という解釈は、もっとも理に適った構図であった。皮肉にも、以後自分たちが安心して暮らしていくためには、事件が自分たちの解釈どおりに解明されなければならなかった。犯人は自分たちが

知る人物であって然るべきであった。

だが、住人たちの推理は外れ、事件はよそ者の犯行と判明した。無情にも、彼らは身近な者の犯行ではなかったとわかって安心するのではなく、失望を感じ、自分たちの推理とは異なる事実を受け入れるのを拒みさえした。すなわち、事実の解明と同時に、ひとの心の中に冷酷な一面が潜んでいることを、この事件は暴き出してもいるのである。

## 注

- (1) Plimpton, George. "The Story Behind a Nonfiction Novel." *Truman Capote's In Cold Blood: A Critical Handbook*. Ed. Irving Malin. Belmont, California: Wadsworth Publishing Co., 1966: 34.
- (2) 稲澤はもう一つの意味を、「ベリーの審理・判決・処刑に関するものであることは見当がつく」と、筆者と共通の見解を示しているが、詳述はしていない。稲澤秀夫「トルーマン・カポーティ研究」南雲堂、1970年、163頁参照。
- (3) 『冷血』はランダムハウス版(1966年1月1日刊行)に先立ち、ニューヨーカー誌上に4回に分けて連載された(1965年9月25日・10月2日・9日・16日)。
- (4) 刑の執行は計5回延期された。Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. New York: Simon & Schuster, 1988: 347.
- (5) クラークによると、カポーティは1960年4月下旬時点では既に『冷血』というタイトルに決めていた。Clarke, 331頁参照。
- (6) Capote, Truman. *In Cold Blood*. New York: Random House, 1965: 95. 以下、このテキストからの引用は全てこの版により、括弧内に引用頁数のみを記す。
- (7) Clarke, 343.
- (8) 内田は例示と併せて、「結局、Perry SmithもCapoteの作品群の登場人物の系譜に位置付けられる一人なのである」と述べている。内田豊「トルーマン・カポーティの作品論集—「グロテスクなもの」との出遣い—」開拓社、2006年、120頁参照。
- (9) 批評家をはじめ多くの人物がカポーティとベリーの共通点に言及している。クラーク事件の主任捜査官アルヴィン・デューイもその一人である。Plimpton, George. *Truman Capote*. London: Picador, 1998: 172-173.
- (10) Clarke, 326.



- (11) Dunne, John Gregory. "Fictitious Novel." *National Review*, 18 (8 March) 1966: 227.
- (12) カポーティは「特にベリーには深い同情を覚えた」と述べている。Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985: 118.
- (13) Clarke, 353.
- (14) カポーティはプリンプトンとの対談の中で、ベリーが「冷血」の原稿を「控訴審へ提出する法的証拠品のようなつもりで読んでいたのだろう」と語っている。Plimpton. *Truman Capote*. 205.
- (15) 特に、ケネス・タイナンによる批判は痛烈だった。タイナンはたとえ不朽の名作であろうとも、人の命よりも重たい作品などないとしてカポーティを非難した。Tynan, Kenneth. "The Kansas Farm Murders." *London Observer*, (13 March) 1966: 21.
- (16) Clarke, 355.
- (17) *Ibid.*, 352.
- (18) クラター事件の調査開始からベリーらの処刑に至るまでにカポーティが味わった苦悩は、彼がこの期間知人らに書き送った手紙類に繰返し記されている。Clarke, Gerald. *Too Brief a Treat: the Letters of Truman Capote*. New York: Vintage Books, 2004: 271-426.
- (19) Capote, Truman. "Death Row, U.S.A." *Esquire*, 70 (October) 1968: 199.
- (20) 田中英夫他編「英米法辞典」東京大学出版会、1991年、563頁。
- (21) Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1980: 152-153.
- (22) 映画「カポーティ」は Sony Pictures Classics により、2005年9月30日に米国で公開された。日本での公開は1年後の2006年秋であった。監督ミラー(Bennett Miller)、原作クラーク (Gerald Clarke)、脚本ダン (Dan Futterman)。
- (23) Clarke. *Too Brief a Treat*. 367.

## 引用文献

- Capote, Truman. "Acknowledgment." *In Cold Blood*. New York: Random House, 1965.
- . "Death Row, U.S.A." *Esquire*, 70 (October) 1968.
- Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. New York: Simon & Schuster, 1988.

——. *Too Brief a Treat: the Letters of Truman Capote*. New York: Vintage Books, 2004.

Dunne, John Gregory. "Fictitious Novel." *National Review*, 18 (8 March) 1966.

Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1980.

Grobel, Lawrence. *Conversations with Capote*. New York: New American Library, 1985.

Plimpton, George. "The Story Behind a Nonfiction Novel." *Truman Capote's In Cold Blood: A Critical Handbook*. Ed. Irving Malin. Belmont, California: Wadsworth Publishing Co., 1966.

——. *Truman Capote*. London: Picador, 1998.

Tynan, Kenneth. "The Kansas Farm Murders." *London Observer*, (13 March) 1966.

稲澤秀夫「トルーマン・カポーティ研究」南雲堂、1970年。

内田 豊「トルーマン・カポーティの作品論集—「グロテスクなもの」との出遣い—」開拓社、2006年。

田中英夫他編『英米法辞典』東京大学出版会、1991年。